

# WSF Japanは必要ない？ スポーツをエンジョイする女性たち

三ッ谷 洋子

4月1日と2日に行なわれたミズノ・オピニオンズ・コンサートのパネルディスカッションの席で、登山家の田部井淳子さんとご一緒しました。彼女は1975年に、女性として世界で初めてエベレストの登頂に成功し、米国のWSFにも世界的なスポーツウーマンの1人としてノミネートされたママさんクライマーです。

プロの選手とちがって、資金調達はご自分でやりくりし装備もいたって質素と聞いて、びっくりしました。たとえば、水筒はマヨネーズの容器、上にはおる防寒服は、車のシートをはぎ合わせたお手製だということです。現代の最先端をいく装備や用具を使って挑戦しても、なかなか征服できないエベレストに、何となくスカミソ臭い主婦の知恵が通用したことに、思わず感嘆の声をあげたものです。

田部井さんの考えは「好きなスポーツをするには、苦勞をするのは当たり前、ブツブツ文句をいいながらやるくらいなら、やめなさい」という印象を受けました。「スポーツにお金は必要ない。普段着で家の周りを走ればいい」といいます。

その時、フツと思ったのは「じゃ、テニスしたいときは、どうすればいいの」。私は学生時代にテニスをしていたので、今でもたまにプレーすることがあります。ところが、昨今のテニスブームで私営テニスクラブの会員権はグンと上がり、庶民のスポーツとはいきれない値段です。（ゴルフより安いとはいいますが）

それでも、暇があれば安くプレーする手はあります。近頃、少しずつ充実してきた公営コートを使うのです。しかし、月1回の申し込み日は、平日の午前中です。仕事を持っている人間にとってそんな時に、役所の窓口に並ぶ時間はありません。かくして、公営施設は、暇を持て余した主婦の独壇場。私営テニスコートは、それよりも少しお金に余裕のある主婦や若い女性であふれることとなります。

以前、私が「スポーツ界にも女性差別がある」という話を、ある男性にしたら「冗談でしょ。ウチの女房は、毎日、朝からママさんバレーに出かけて、ろくに家にいない」とこぼすのです。「これ以上、女性スポーツを振興したら、ボクなんかたまらないよ」というわけでした。

確かに、ある意味では、今の日本では男性より女性の方が、恵まれている面もあるでしょう。しかし、どこかがオカシイとは思いませんか。

私はモスクワ・オリンピックの前後に、4回ほどソ連に取材に出かけました。大会のメイン会場となったレーニンスタジアムのまわりには、ズラリとテニスコート、バレーボールコートが並んでいて、夕方ともなると仕事を終えた人たちが三三五五やってきて、プレーに興じていました。オジイちゃん、オバアちゃんという年齢の人まで、北国の遅い日暮れを待ちながら楽しんでいるのです。

こういった市民のためのスポーツ施設が、ソ連ではとても充実し、しかも十分に活用されています。スポーツクラブは、労働組合のバックアップで、会費はタダ同然の非常に安い値段です。フィギュアスケート、乗馬、ヨットなど、日本ではお金のかかりそうなスポーツも、同様に手軽に安くできるのです。スポーツを好きなときに、しかも安く楽しめるのがソ連でした。

こんな社会主義の国・ソ連に対し、金持ち大國ニッポンの現状は、前にも書いた通りです。ふだん懸命に仕事をしている人にこそ、スポーツはより必要なのです。お金や暇のある人だけのスポーツではないと思うのです。そこで、まず女性の側から少しずつ社会の環境を整えたいというのが、WSF Japanの意図なのです。現在、会員は21人。先ごろ新たに、日立バレーボール部の総監督、山田重雄さんが、会員になられました。一度、女子選手の指導法などについて、お話をうかがいたいものです。